

会員だより

ドイツ交流の旅

ラーストハブニング

4 回目の「ドイツ交流の旅」は、真つ青な高い空と冷気と爽快な季節で、毎日メンバーの誰かの知人が登場参加するという愉快なサプライズ旅であり、最終目的地ミュンヘンのビール祭り（オクトーバーフェスタ）で1リットルのジョッキでミュンヘンビール（ホーフブロイ）を飲む酒豪メンバーの旅でもある。



6時半に出発し、ミュンヘン発の国内便は11時の離陸、フランクフルトで乗り継いで、約11時間で、翌朝関空に着くはずだった。12時になっても、飛行機が来ない、と突然臨時便に乗り換えます、早くと説明があり、機内持ち込みの荷物（約5キロ）を

肩に、そのゲートに走る。1時間後フランクフルト着。これでも、日本人かと疑うほど速くしゃべり、空港ガイドの女性が「15分後にゲートがクローズするので走って」と指示。Zゲートへまたもやカートに手荷物を乗せる暇もなく、全員、疾走する彼女の後広い空港を走り回り、間一髪で間に合いドイツよ、さようなら！ 座席は狭いエコノミーシートの不運にも真ん中、しかも前の中国人が座席を最大限に倒しつばなし、合図をしても無視。11時間ほとんど眠れず映画3本観る。(面白

いものもあつた) いや々な予感の通り私たちのスーツケースは見事にミュンヘンに取り残された。どくどくと疲れが出て、2時間遅れでJR茨木で空港リムジンバスを降りた。疑ったことだろう。足をひきずり、荷物も満足に持たず、サングラスを外した顔は腫れあがっていた。こんなことは今までなかったことだ。それから連休だったので、2日間ダウン。3日目に

内科で点滴、4日目に皮膚科でドイツの硬水で洗顔したのと、帰国早々の残暑の汗で炎症を起こしたということ、お薬をいただき、1週間でやっと回復した。 Y・I

長岡京期の服飾
常設展示の

古代衣装を学ぶ

右記の歴史講座が向日市文化資料館であり参加しました。

講師は服飾研究家の山口千代子先生で、高松塚古墳の壁画から、奈良時代、長岡京時代の衣装についてのお話でした。

服装は官位、等級などによって服の色が定められていました。六九〇年ごろは朱華(赤)が最高で、少し薄い赤、黒紫、赤紫の順になっていました。赤は紅花から作られ何度も染めて、色が濃いほど高貴な色とされてきました。また紅花は防虫効果が強く、赤い袴は女性の下着で後の地獄図でも刑罰をうける女性は赤い袴だけは着けていたということ。 七十八年ごろには最高の色が黒紫、次いで赤紫、

薄い紫の順となっており、それはそのころには紅花が多く栽培されるようになって、希少価値が下がったからだと考えられているそうです。



また当時の絹のキレはものすごく薄くガーゼのようなものだったそうで、夏も冬も同じで支給される服は1枚なので、それを洗濯する休暇があったそうです。 F・M

いつまでも命輝いて

宮之川原の貸農園で殆ど毎日お見かけする老人がおられる。大正8年生れの94歳のNさんとい、自転車か手押し車で自宅と畑を行き来して、一人約10坪の菜園を楽しんでおられる。このNさんからお聞きした戦争体験は貴重なもので皆様にもこの感動をお伝えします。

筋のお寺に1週間留め置かれ、行先も告げられず、大阪港から出航した。貨物船の船倉に送り込まれ、みなくたくたに船酔いした末、天津近くの塘沽(タンクー)に上陸した。その後万里の長城近くの張家口で半年間砲兵初年兵として革靴・火薬・脱ガス等の訓練をうけた。大阪から来た者にとつて寒い所であった。

その年の8月編成隊が生まれ、第2旅団に6カ月属し、北京近くで初年兵の教育係となった。砲兵隊は観測、馬係、通信等に分かれ、テツチン、大砲、ラツパ係もいた。 Nさんの思い出深いのは蹄鉄工兵修業から第63師団病馬廠に転属となり、馬との付き合いが楽しかった事、一番怖かったのは八路军軍(華北で活動した中国共産党革命軍)が畑の中から突然鉄砲を打ってきたとき、まさに頭の上を弾がかすめた時だったとか。すでに支那事変(日中戦争の日本側の呼称)真つ只中、大東亜戦争(太平洋戦争の日本側の公称)の勃発でいよいよ戦場化として

いった。Nさんの所属する第63師団は北京・保定など移動したが、昭和20年連合軍による本土決戦の報が伝わり、5年以上の者が本土を守る為と呼び戻された。海上では下駄足飛行機に守られ、山海関国境から韓国釜山經由で宇都宮に着いたのも束の間、再度の召集で8月和歌山に到着した翌日終戦を迎えたようだ。

命を的に6年間生きてこられたNさんは誰よりも命の大切さを感じておられ、戦争はいかん、とつぶやかれる。Nさんの菜園はどこよりも輝いている。明日もまたお会いできるようにと願って、帰りの挨拶をする私も終戦間際の戦災で何もかもなくし家族の命だけが残った一人、あらためて平和の尊さを次世代に伝えていきたい。 S・U

